

クラスペットが行方不明に！

—非常時に見せた行動と思考（6年4組の場合）—

片山純子

1 はじめに

子ども達が、身近なところで動物を飼い、ふれ合うことの意義やその効果については、多く語られるようになってきた。その反面、動物を飼っているからこそ直面する苦労や悩みも多くあることが現実である。時として、思いもかけない大きな問題にぶつかることもある。しかし、問題にぶつかったからこそ見えてくる大切なこともある。

クラスで飼っていたモルモットが、放課後の教室からいなくなった。モルモットの性格を考えても、自分から逃げ出したとは考えにくい。教室にいるペットを、まるで自分が逃げ出したかのようにケージに細工してまで連れ去るようなことが起こるとは、私は想像もしていなかった。

いったい誰が？何の目的で？モルモットがかわいいからなのか、大騒ぎになったり誰かが困ったりするのが面白いからなのか、それともいたずらや虐待目的なのか・・・私は、今まで経験したことのない大きな問題に直面し、強いショックを受けた。

モルモットの身を案じ、教師という仕事にさえ自信をなくし、毎日涙を流していた私を救ってくれたのは、私以上にモルモットを心配し、必死になって探す努力をした子ども達だった。自分たちの教室でかわいがっていたペットがいなくなったという大事件に遭遇して、6年生の子ども達は、誰が連れ去ったということより、小さなモルモットの無事を祈り、問題解決に取り組む姿を見せてくれたのだった。

2 モルモがいなくなった！

教室でモルモットを飼い始めたのは、今から5年前のことである。このときの教え子たちは今中学2年生になっている。私自身、動物が大好きだったこともあり、この年に限らず、教室には何か生き物がいることが多かった。モルモットを飼うことに大喜びの子ども達は、担任に相談もせず、名前を自分たちで話し合っただけで決めてしまった。その時ついた名前が「モルモ」である。以来モルモは私が担任する子ども達と一緒に教室で過ごしてきた。



今年もまた、新しく担任した6年生と飼い始め、一ヶ月半ほど過ぎたある日のこと。いつものように帰りの挨拶をしたのが2時30分。教室に子どもを残したまま、あわただしく1階へ降り、用事を済ませ、子ども達が完全に下校したかどうかを確認するために4階の教室に戻ってきたのが、3時。この日は、5時間日終了後、家庭訪問日になっていたの、すでにこの時間には教室にも校舎内にも児童は残っていなかった。

ふと、モルモのケージを見ると、ケージの上の部分の部分が少しずれている。ケージの中の小さな木の小屋も後ろ向きになっている。怖がりのモルモは、この木の小屋の中によく入っている。きっと、さようならをした後、モルモと遊んでいた子どもが、あわてて下校する際に、こんな風にしてしまったのだろう、しょうがないなあ・・・などと思いながら、小屋をも持ち上げると、そこにモルモの姿はなかったのである。

モルモが隠れていそうな教室の隅にもいなかった。職員室にいる職員にも訴え、学校中を手分けして探したが、見つけることができなかった。モルモは教室から連れ去られたに違いなかった。

3 みんなでモルモを探そう

翌日、モルモが行方不明になったことをクラスの子も達に伝えなければならなかった。見つけたときの状況や学校中探したがいなかったこと、何より怖がりのモルモが知らないところでどんなにおびえているか、心配

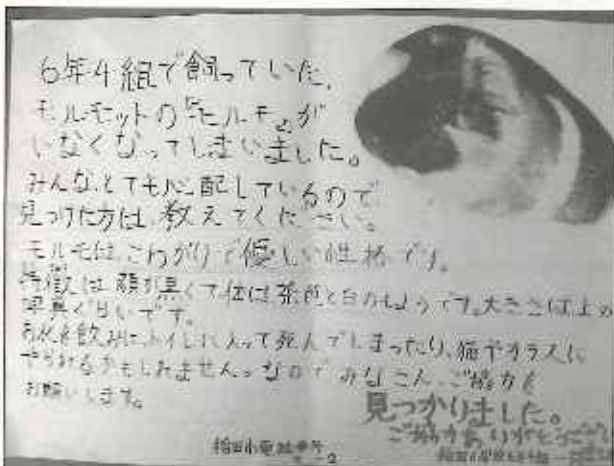
で心配でたまらないことを涙を流しながら話した。子ども達の前でめったに泣かない私が、涙を抑えることができなかった。

短い期間の中でも、モルモの性格や行動を知っていた子ども達は、「モルモが自分から逃げ出すはずはない。」「誰かがモルモを連れ去ったに違いない。」と感じているようだった。しかし今は、誰が連れ去ったのかというより、とにかくモルモが無事でいてほしい、戻ってきてほしいという思いを訴えた。

私の涙ながらの訴えを真剣に聞いていた子ども達の中から、みんなでモルモを探そうという声があがった。まずはポスターを作っていなくなったことを伝えようということになった。ポスターに書く文面は、私が大まかな内容を提案した。モルモの写真はコピーして写真に貼ることにした。できあがったポスターをみると、提案した文面を元に、一人一人が個性あふれるポスターを作り上げたことがわかる。私が知らないところでモルモの様子をよく見ていたことにも気づかされた。新しいことへの取り組みには消極的だった36人の子ども達が、誰一人文句も不満も言わず、黙々とポスター作りに取り組んだ。

作ったポスターは、各クラスへ持って行って、直接お願いするように分担当した。さらに、モルモが校外に連れ出された可能性を考えて、コンビニエンスストアやマンションや町内会の掲示板にもポスターを張り出してもらえるように頼む子どもも出てきた。近くの動物病院にもお願いした。チラシを作って駅のそばで配りたいというこのために、ポスターを印刷した。交替にも行って届けを出した。放送委員会の子どもは、校内放送でモルモのことを伝えようと提案してきた。

モルモを何とかして見つけよう、無事でいてほしいという思いは、子ども達の自主的な



搜索活動に結びついていった。

「6年生が教室で飼っていたモルモットがいなくなった！」このニュースは瞬く間に全校児童の知るところとなった。さらに、搜索願いのポスターが街の中にも張り出されたため、モルモと一緒に飼っていた中学生になった教え子たちも、心配して小学校まで様子聞きに来た。街で会えば、「先生、モルモ見つけた？」と誰もが声をかけてきた。卒業生の保護者までが、電話をかけてきてくれた。卒業しても、子ども達の心に残るモルモだったんだ・・・と改めて考えることができた。

4 モルモが見つかった！

教室から連れ出した人物が、たとえどこかにモルモットを放したとしても、怖がりの性格から、誰かが見つけられるような場所にうろろしているはずはない。かわいいからという理由以外、たとえばいたずらや虐待目的であるならば、見つかる可能性はもっとなくなるだろう・・・。連れ出したのは誰なのか・・・。様々な思いが脳裏をよぎり、毎朝学校に近づくたびに涙があふれそうになる自分を励まし、希望を失わないように毎日過ごして3日目、放課後、「モルモットを保護したという人が玄関に来ています」という連絡をもらった。

それまで、低学年の子ども達から、図書室で何か動いていた、廊下を歩いているのを触った、池の近くで見つけた、と信じられないような情報が寄せられ、それでももしかしたらという思いでクラスの子ども達と必死で探してはがっかりするという毎日だったので、保護したということにもすぐには喜ばなかった。

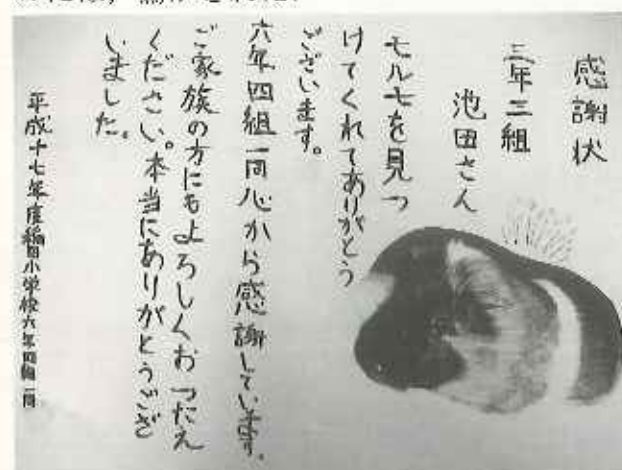
3年生の保護者というその人は、携帯カメラに保護したモルモットの写真を撮り、私に見せてくれた。それはモルモだった！

学校から500メートル程はなれた自宅近くでモルモを見つけ保護してくれた3年生の保護者は、かわいいので、娘にもちょっと見せたいと思い、帰宅するまで自宅に置いていたのだった。そのモルモットを見た子どもが、「そういえば、6年生の教室からモルモットがいなくなったって言って探していた。」と伝え、写真を撮って確認に来てくれたのである。

モルモは怪我もなく、元気な様子だった。すぐに、電話連絡網でモルモが見つかったことを、クラスの子ども達に伝えた。

翌日、誰がモルモを発見し、どのような状態だったのが丁寧に詳しく説明した。様々な偶然が重なって見つけてもらえたことは、奇跡的だったと話し、「でも、その奇跡を呼んだのはみんなの願いだね。思いが通じたんだよ。モルモがみんなの優しさに気づかせてくれたよ。「一緒につらいことを乗り越えたね。」と伝えた。どの子にも、ほっとしたような表情がうかんでいた。

モルモを見つけてくれた3年生と保護者には、感謝状を贈ることになった。手作りの感謝状を持って、クラスの半分以上の子が3年生の教室まで行き、みんなの前で感謝状を読み上げて手渡した。ポスターをもってお願いにいった各クラスにも見つかったことを報告した。校外でお願いしたところにも、お礼にいき、ポスターには「見つかりました。ありがとうございます。」と書いてもう少し張り出してもらおうようにした。それらのことを私が伝える前に、すでに行っている子もいたのには、驚かされた。



5 モルモと一緒に

モルモと一緒にの学校生活がまたスタートした。このようなことがあって、再びモルモを学校で飼うことに抵抗がなかったわけではない。しかし、モルモが帰ってくることを願っていた子ども達の気持ちを考えると、このままモルモを私がかかえ込んでしまい、もう教室で飼わないことが解決策になるとは思えなかった。

言葉に出すことは少なくとも、モルモを大切に思っている子ども達の気持ちを様々な場面で感じる事ができた。大きな問題を乗り越えて、モルモと子ども達の絆は、以前より深まったように思われた。

例えば、調理実習の後には、使った野菜の残りを「モルモの分」と別にとっておいたり、



じゃんけん争奪戦の末勝ち取ったデザートの実物も、モルモにはちゃんと分けてあげたりすることができた。運動会の時には、「モルモは運の強い子だから、きっと勝利の神様になってくれるよ。」と勝利を誓う寄せ書きにモルモの名前を書いていた。

見つかったモルモットを見に、他学年の児童も教室に遊びに来るようになった。休み時間返上で遊びに来た他学年の児童の相手をし、モルモットのことを優しく教える姿に6年生としての頼もしさを感じることができた。

ある日、こんなことがあった。机やオルガン、ゴミ箱などを蹴飛ばすなどして暴れた児童がいた。あわてて教室に行ってみると、子ども達はモルモをケージから出して抱っこし、優しく声をかけていた。「先生！モルモがおびえちゃってる！」「大丈夫かな。」暴れた児童のすぐそばにモルモのケージがあったのだ。その児童にも落ち着いてからそのことを話すと、「あっ！（まずい・・・）」という顔をしていた。

モルモを囲んでのたくさんのエピソードに心が温かくなった。

モルモが見つかった一週間後、保護してくれた3年生の保護者から、素敵な手紙が届いた。

『片山先生へ モルモも子ども達も元気そうで何よりです。先日、感謝状をいただいたと嬉しそうに帰ってきました。“恥ずかしかった”と言いながらも何だか得意げな娘の表情は、とてもキラキラしていた気がします。普段は、自分から担任の先生にさえあまり話しかけない娘が、6年生の教室に遊びに行ってきたと聞いた時には、とてもびっくりしました。小さなモルモが、娘に行動する勇気くれた様で、私の方が感激しています。6年

生の教室では、娘たちを温かく迎えてくださって本当にありがとうございます。

これからも、モルモを通して、いろいろなことを子ども達へ伝えてください。陰ながら応援しています。』

この手紙はまた私に勇気をくれ、大切な宝物になった。

6 終わりに

様々な悩みや問題を複雑に抱えている子ども達は、今信じられないほど増えている。しかし、その心の闇が生きている動物に向けられるとは、私は想像もしていなかった。それに、気づけなかったということもショックだった。モルモが見つかったから、解決したとは決して思えない。子ども達の見えない心に気を配り、ケアができるようになっていくことが、これからの大きな課題であると思っている。

モルモのことが良い結果に終わったことは辛いだった。みんなが見せた積極的に問題解決に取り組む姿勢、行動力、共に味わった一体感は一一人の財産になったことだろう。

ある児童が一学期の終わりにこんなことを書いていた。

『私の心に残る思い出は、モルモがいなく



なったこと。クラスでの協力は、これが初めてだったと思います。私は、このクラスに入ってから、クラス全体が一つのためにこんなに必死になることはいいことだと思いました。だから、2学期になっても、クラス全体で力をあわせて、卒業まで楽しくこのクラスで過ごしたいです。』

モルモが大好きで、帰ってくることを願っていた優しい子ども達の心を信じて、これからもクラスペットを飼い続けようと思う。

(川崎市立稲田小学校教諭)

